

## 隣国との関係



## 十五代 沈 壽官

最近の日韓、日中のギクシヤクした関係に心を痛めている人々は多い。心を痛めている人は日本人だけではない。韓国や中国にも数多く存在する。僕は北東アジアを考えると昔は時間の針を大きく戻す。古代、海人族と呼ばれる人々が日本にやって来た頃いだ。

渡来の海人族は先住民と争い、やがて調和しながらそれぞれの国に収斂され、そして今の『日本』へとまとまっていた。渡来の民は移住に伴い、多くの技術をもたらした。稲作、青銅器、製鉄、文字、仏教、等々、彼等が日本文化の骨格形成に果たした役割は計り知れない。

渡来人とは初期的には朝鮮半島南東部に位置した金海伽耶国の人々であり、後に大量の百濟人、やがて新羅、高句麗、更には揚子江以南の江南の民であった。

半島や大陸で戦いが起こるたびに押し出される様に人々は日本に渡って来た。つまり、日本にいる我々は大陸や半島から、遙か昔、理由あって日本に向けて旅立った、あるいは逃避した人々の子孫であり、現在半島にいる人々は、我々の先祖を追い出したか、見送った人々の子孫と言える。つまり、同じ出自を持つもの同士である。

我が家の初代、沈当吉達も秀吉の朝鮮出兵の際の戦争捕虜であったが、薩摩に釉薬の掛かった高火度焼成による陶器製造技術を伝えた。この時期に、樟脳製造、養蜂、木綿栽培、土木測量、医学、刺繍、製瓦等の技術も半島より伝来している。

朝鮮出兵時、帰国の際、西国大名が連行した朝鮮人捕虜は凡そ五万人と呼ばれる。職能人であった彼等がその後の江戸時代の文化を如何に下支えたのかについては説明する必要もあるまい。

天皇陛下も、日韓ワールドカップ共催の折りに『桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています。』と述べられシヨックを与えたが、つまりそれほど古い時代から交流の歴史があるという事だ。

中国と言う母なる大地から乳房の様に張り出した朝鮮半島、そこに添い寝をする赤ん坊のような日本の姿を俯瞰すると、多くの知識や経験、人材が中国から朝鮮半島を経て日本に流れ込んだ事が頷ける。

しかしいくら元が同じでも異なるものもある。それは自然環境である。環境の違いは日々の営みの違いを、やがて風土の違いを生み、そこに暮らす国民のメンタリテイの違いに至る。

さて、大昔、プラトンという哲学者がこう言ったそうだ。

『国民とは怪力を持った船主である。しかし、良く目が見えず耳も遠い。そして政治家とはその船の舵に取りついている水夫である。水夫達は怪力の船主の視力と聴力の弱さに乗じて、耳触りの良い言葉で船主を寝かし付けてしまおうと考えている。怪力の船主が寝てしまえば、この船を自分たちの好きな場所へ運べるからだ』と。

国家と国民の関係を看破した視点だ。

仮に、異なる船が並んでいるとする。舵に取り付いた片方の水夫が短慮な見識を叫んだとしよう。それをメデイアという情報商が、即時に調理しそして販売するのである。それにより、水夫の不見識は増幅、拡大される。このメデイアの存在が大昔は無かった現代社会の特徴だ。

その結果、相手の水夫のみならず、耳が遠く、目の悪い相手の船主をも苛立たせる。呼応するように相手の水夫も吠え、相手のマスコミも即座にその声を調理販売する。

そこには船主同士の会話は存在していない。あるのは相互の水夫の罵声とマスコミによる情報の拡大販売だ。

作家、司馬遼太郎氏が以前私にこんな手紙をくれた。

『民族とは些末な物です。文化の共有個体

に過ぎず種族ではありません。互いに面差しが違うのは環境、風土によります。昔の人が水が違うだけだ、と言ったのは見事なものです。

中略

今の日本人に必要なのはトランス・ネーションと言う事です。変圧器の中を電流が流れたり、シャーマンの心に神が行き来するように。強く日本人でありながら中国、韓国的心が分かると言う事です。

中略

小生も年少の頃からそう心掛け、自らを一個の人類に仕上げた積もりです。そして恐らく愛国者（無論、日本への）です。真の愛国はトランス・ネーションの中に生まれます。』と。

現在の日韓、日中を思うとき、その近さゆ

え不幸な出来事が数多く存在した事は間違いない。しかし、それはある意味、宿命的な事であろう。ただ、私達日韓中の船主（国民）は、互いの水夫の不見識とマスコミのアクションに翻弄されすぎてはいないだろうか。

メディアに頼るあまり自らの目や耳で確認せず、判断すら委ねてしまい、却って相互に負のスパイラルに陥っているようだ。

大切な事は互いの違いと近さを知り、許し合う姿勢で接する態度であろう。

天皇陛下はゆかり発言の後半部でこう述べられている。『それぞれの国が歩んできた道を正確に知り、個人個人として、互いの立場を理解していく事が大切です』と。

この言葉に勝る隣国関係はないと確信する。



沈壽官窯・工房



白薩摩茶碗 伝火計手  
 伝 初代 沈当吉  
 十七世紀初頭 沈家伝世品収蔵庫 蔵

薩摩焼は豊臣秀吉による朝鮮出兵に参加した島津義弘が帰国の際に、当時の陶磁器生産の先進地であった朝鮮半島から連れ帰った陶工によって創始された。当初は御庭焼として、義弘のもとで主に茶道具が焼かれたが、中でも、陶工たちが持参した朝鮮の土と朝鮮伝来の技術により、火ばかりが薩摩のものでつくられた薩摩焼を「火計手」と呼ぶ。火計手と伝承のある薩摩焼は、白土に透明釉の掛かった白薩摩茶碗を中心に十数種が知られているが、後世の作とみられるものも多い。沈壽官窯に伝来するこの茶碗は、還元焼成により表面はかすかに青みを帯び、ゆったりとした丸みを帯びた大振りの姿に、低く径の大きな高台で支えられた荘重な古格の漂う作品である。